

# 日本古代における女性の恋愛観

— 『萬葉集』の女性歌人を中心に—

時 新 昊\*

## 1. はじめに

周知のとおり、日本神話に女性の神がよく登場し、主神の天照大神も女神であり、伝説と記紀物語においても卑弥呼をはじめ、推古、皇極、持統のような女性権力者を記述する。これらの文献に何処までが史実か分からないが、恐らく祭政未分化の当時<sup>1</sup>に女性と王権の関りをいくぶん反映できると思う。考古学研究の色々な成果<sup>2</sup>からも、昔全体として女の地位が高かったと推測できる<sup>3</sup>。古代国家の形成につれ、政治を祭祀から独立させて王権を強大化しなければならなかった<sup>4</sup>ため、王権の聖性を担っていた女性<sup>5</sup>は次第に王権から排除され<sup>6</sup>るようになり、女性の地位も下がってきた。それに加え、律令制の施行や奈良末期から儒仏思想の発展により、平安時代に至って女性天皇が見られなくなった。また、男が複数の女性と関係を持つ例も希ではなかったため、女性は男の訪れを待ちながら、独りの苦しさや切なさを味わった。その結果として、女性たちが和歌によって女性特有の内省的な悲哀を表出した<sup>7</sup>と認識された。しかし、当時の女性にとって恋愛や結婚は果たして悲しさしかなかく、単なる苦痛を受けるものなのだろうか。

恋愛が「當時の若い男女には缺くべからざる武器であつた」<sup>8</sup>と言われたその時代には、恋愛と結婚の主導権を失った女性も、自分の気持ちを和歌に詠み上げたため、『萬葉集』より彼女たちの

恋愛観を垣間見ることができるだろう。

## 2. 先行研究

『萬葉集』の恋歌をめぐる研究が数多く見られ、主に恋歌全体（作者を問わず、男性・女性・知らぬ人が詠んだすべての恋歌）、または女歌（女性が詠んだ歌と、男性が女性「のような発想に立って」<sup>9</sup>詠んだ歌）に着目したものである。その中には、一部の研究が恋歌におけるある言葉の使い方について論じた。また、一人一人の歌人を取り上げ、各自の歌風に焦点を当てて論じたものもあるが、単に女性歌人の歌に主眼を置いて女性の恋愛観を検討する論述は、管見の限りまだない。

それゆえ、本報告は先行研究を踏まえながら、主に『萬葉集』<sup>10</sup>における女性歌人の代表的な歌にしぼってその特徴を把握し、恋に落ちた古代女性の心象風景を掘り下げてみたいと思う。

## 3. 和歌における恋愛表現

### 3.1 恋愛を追求する歌

『萬葉集』に記載される和歌がよく恋人と逢瀬した後の切なさや寂しさを描く一方、女性が持つ恋愛・婚姻への憧憬も、歌によって表出される。例えば、以下の長歌と後につける反歌を見よう。

ひさかたの 天の原より 生れ来たる  
神の命 奥山の 賢木の枝に 白香つけ  
木綿とり付けて 斎瓮を 斎ひほりすゑ

\*国立台湾大学大学院生

竹玉を 繁に貫き垂れ 鹿猪じもの 膝  
折り伏し 手弱女の おすひ取り懸け  
かくだにも われは祈ひなむ 君に逢は  
ぬかも<sup>11</sup>

大伴坂上郎女 『萬葉集』 3-0379

木綿畳 手に取り持ちて かくだにも  
われは祈ひなむ 君に逢はじかも<sup>12</sup>

大伴坂上郎女 『萬葉集』 3-0380

神祭の歌であるが、内容から見ると、実は「運命の人」に逢わせてくださいと神様に自分の恋を祈っている。恋を望んでいた女子の敬虔な姿を浮き彫りにしている。作者の大伴坂上郎女は生涯のうちに、恋愛相手を多く持った一方、恋人と次々に別れ、死別さえ数回体験した<sup>13</sup>こともある。彼女は恋愛に失望したこともあるかもしれないが、絶望することはなく、依然として恋に憧れて希望を持ち続けていたようである。こういう情熱に生きていた恋心が見られる。では、次の数首はどのような気持ちを含んでいるだろうか。

古りにし 姫にしてや かくばかり 恋  
に沈まむ 手童のごと<sup>14</sup>

石川女郎 『萬葉集』 2-0129

「古りにし姫にし」という表現が、作者のすでに若くないという事実を説明し、また作者の自嘲だと思われる。恋心を抱いて焦がれるというのは、乙女らしい振る舞いであり、老女の歳と強烈な対照になる。それに、女性が幾つになっても恋に対する憧れを失わず、いつも女心を持っていると暗示する。恋に落ちると、年取った女性さえも少女のようにドキドキする。たとえ片想いだけでもそうであろう。奈良時代だけでなく、平安初期に至ってこのような熱い憧れも見られる。次の歌を見てみよう。

春ごとに 流るる川を 花と見て 折ら

れぬ水に 袖や濡れなむ<sup>15</sup>

伊勢 『古今和歌集』<sup>16</sup>春1-0043

水面に映った花を折ろうとするのにできなく、かえって袖を水で濡らす。しかし、川に映った花が本物ではないことを知っていても、次の春になると、また枝を折ろうとする。来年も同じ、それを「春ごとに」繰り返す。古代の仮名表記では「流るる」が「泣かるる」と同じく濁点なしに「なかるる」と表記されるため、ここで袖を濡らすのは川の水ではなく、涙ではないだろうか。すなわち、この一首が春を歌い上げるように見えるが、実は作者が自分の恋心を詠んでいる。相手を運命の人だと思い込んで愛したのに、結局自分を傷つけてしまい、その傷を癒した後また同じことをする。恋愛がうまくいかない憂いが表されると同時に、歳月が川のように流れても、何度失敗しても諦めないでまた繰り返して求めるという、美しい恋への憧れも見取れよう。

上述した女性歌人の和歌から、恋がまだ成就できない寂寥と同時に、恋への憧れや、胸に燃え上がる情熱も見られる。恋愛の世界には年齢制限がなく、幾つになっても、何回も失敗しても、幸せになりたいという女性の恋心が変わらなく、いつまでも乙女のようなものである。

### 3.2 悲しさを詠む歌

女歌には「悲恋」「孤悲」が主な要素であると先行研究<sup>17</sup>が述べるように、悲しい気持ちが女歌における地位を否定できないが、その中に含まれている女性たちの特有の積極的な態度も注目すべきである。例えば、

夏の野の 茂みに咲ける 姫百合の 知  
らえぬ恋は 苦しきものぞ<sup>18</sup>

坂上郎女 『萬葉集』 8-1500

一見するとこの歌が相手に「知らえぬ」片思い

を表すが、作者の本音が「姫百合」に隠されていると考える。『萬葉集』には、姫百合を詠む和歌がただこの一首だけであるため、万葉時代において姫百合が具体的にどんなイメージを持っているかは、すぐに分からない。しかし、姫百合の「姫」が「秘める」と同音であり、後の「知らえぬ恋」に繋がって呼応することは明らかである。また、姫百合は白百合と異なり、茎が細く、赤やオレンジの花が明るくて小さい植物である。草に隠れて人に見られなくても、年ごとに咲く。作者はそういう姫百合に託して、自分の気持ちが相手に知られなくても続ける、という決心を暗示する。色彩から見ると、「夏の野」に茂って生きている草の緑と姫百合の赤とは、強烈な色対比になる。この対比によって甘やかな雰囲気を作りだし、その赤い花と同じように鮮やかな作者の慕いが感じられるだろう。

白鳥の 飛羽山松の 待ちつつそ 吾が  
恋ひわたる この月ごろを<sup>19</sup>

笠女郎 『萬葉集』 4-0588

「白鳥の」が飛羽山にかかる枕詞であり、「松」が「待つ」と同音であるため掛詞で序詞となって後の恋人への思いを引き出す、と一般的に解説する。しかし、筆者は空に飛ぶ白鳥が作者の恋い慕いを恋人に伝える使者、また「松」が不老長寿の象徴として理解したい。空を渡る白鳥の目的地が明確に分からないため、作者は相手の来ないこと、あるいは自分の待ちが果てなく無駄であり、恋が叶わないと知っているだろう。それに、『詩経』<sup>20</sup>に載せた「松柏の茂る如く、爾に承くる或らざる無し（小雅・天保）」というように、松は冬になっても緑を失わないため、日本だけでなく、中国でも古くから長寿のシンボルとして知られている。作者は松の不老長寿の意味を取り上げ、自分が松のようにいつまでも恋人を待ち続ける意志を暗示するだろう。自身の辛い気持ちと切ない女心を詠

みあげながら、愛する人に対する熱い情意も表し、それに、白鳥と松という言葉によって一生を恋に捧げる執着心も含意し、自分の諦めない思いを植物に託して歌った一首である。以上の二首、いずれも一緒にならないという悲しい雰囲気が漂っているが、女性たちが諦めずに恋に執着する熱情も感じられる。

衣手を 打廻の里に ある我を 知らに  
そ人は 待てど来ずける<sup>21</sup>

笠女郎 『萬葉集』 4-589

道遠み 来じとは知れる ものからに し  
かぞ待つらむ 君が目を欲り<sup>22</sup>

藤原郎女 『萬葉集』 4-766

この二首とも、相手の来なかったことが「私の居場所が知らないから」や「私の居場所が遠いから」と懸命に自分を納得させ、ずっと待ち続けていた女性の姿を描いている。しかし、孔子が「未だ之を思はざるなり、夫れ何の遠きことか之有らむ（論語・唐棣之華章・子罕第九）」<sup>23</sup>と指摘した通り、男が本気で好きになると、なんとしても居場所を探し当て、家の遠さも問題ではない。相手の来ないのは、男がまだそれほど好きでなく、恋する思いが足りないことを証明する。すなわち、女の待ちが無駄である。実はこの二人の女性はもう、相手の心が徐々に遠ざかってしまったということを感じ、不安を覚えているであろうか。単なる信じたくないため、一方的に情熱を抱き続けている。

続いて、次の一首における「死ぬ」という表現に注目したい。

朝霧の 鬱に相見し 人ゆゑに 命死ぬ  
べく 恋ひ渡るかも<sup>24</sup>

笠女郎 『萬葉集』 4-0599

「朝霧」のような逢瀬の短さは、一生を「恋ひ

渡る」という長さで強烈な対照になり、作者の恋に対する命が絶えそうなほどの情熱を表している。相手が一度きりしか逢わなかった人、すなわち不確定性が高い恋であるのに、依然としてこの恋に自分を賭ける。『萬葉集』にはこのような「死」に関する表現が珍しくない。例えば、狭野弟上娘子の収載された二十三首の歌の中に、三首<sup>25</sup>は「死」によって思い慕いの苦しさを伝わる。しかし、本報告で言及したこの一首には、「死ぬ」が恋に悩ませて死ぬほど苦しくなるという意味ではなく、命をかけても恋を続けたいことである。恋愛に対する切なさを表現するどころか、逆に「命死ぬべく」より、作者の強烈な情熱と執着心が読み取れるのではないだろうか。

ちなみに、恋に落ちた女の思い慕いが死ぬほど強烈であるのは、今から見ると寧ろ普通なことだと思われるが、言霊を信じた古代の人々にとって「死」が非常に重い表現である。「事魂の佑はふ国」<sup>26</sup>に生きた人は吉な言葉を言うといい事が起こり、不吉な言葉をいうと悪い事が起こると信じる。もちろん、女性たちも言い出した言葉に力があると思う。しかし、好きな人と一緒になれば、言霊でも何でもかまわない。和歌の詠み上げた「死ぬ」により、作者の恋に対する本気と決意、また迸る情熱を表出している。

要するに、上記の数首は一見するとすべて悲しさを詠み、消極的な和歌であるが、そういう寂寥感と哀愁の中に、実は女性たちの恋心や、恋への執着と情熱が含まれている。相手の気持ちを分からなくても矜持せず、自分の本心を素直に伝えたいという、恋に対して女性側の積極的な態度が感じられるだろう。

### 3.3 歴史的背景をめぐる考察

ここまで見てきたように、女性歌人の歌には一種の陰鬱な雰囲気を感じられるが、その裏に彼女たちの恋への相変わらぬ憧れや、強い執着心と情熱が含まれていると推察できる。もちろん、恋を

望むのは人間の本能的な行為であり、また、恋に落ちると、衝動的に相手とずっと一緒にいたく、自分が自分ではないような感じになってしまうと言われる。その一方、当時の社会背景などの外的要因も、女性歌人の歌に一定の影響を与えただろうと思う。

先行研究で指摘されたように、歌は万葉人にとって非常に重要な「武器」<sup>27</sup>である。一般的なコミュニケーションも、恋も和歌を通して始まって発展するため、男女関係において歌は決定的な意義を持っていると思われる。もし女性歌人が歌によって悲しみしか詠み上げなかったら、彼女たちの激しい情熱と恋への憧れが伝わりにくくなり、恋する機会を失う可能性もあるだろう。また、当時行われた「妻問婚」という婚姻形態により、男性が女性のもとへ通う一方、女性が相手の訪ねにきてくれるのを待たなければならない。男性の来訪を促すために、女性たちが「『待つ』ことの辛さ」<sup>28</sup>ばかりでなく、「自分の愛情」<sup>29</sup>や情熱も和歌に読み込んで相手に送る。すなわち、女性歌人の歌を通して詠まれた恋に対する嘆きと憧れは、単に彼女たちの気持ちのみならず、男性の訪ねを促し、恋愛をさらに推し進める機能があると言えよう。

なお、女性たちの積極的な恋愛観が、当時の規則や制度からも影響を受けたと考える。『日本書紀』に記載された大化の改新の内容<sup>30</sup>によると、当時の女性は離婚を要求する権利があり、離婚して名誉も失わずに再婚できる。また、夫の一方的意志による離婚の場合には、妻が本来生家から持参した財物を返還され<sup>31</sup>、すなわち、離婚した夫婦が別々に自分の財産を所有したことは明らかである。成清弘和氏が「婚姻において女家側のみの関与を重んじることと対応し、離婚時に妻の持参財産が全面的に保護され」るため、「婚姻生活における妻の経済的自立性を窺わせる」<sup>32</sup>と主張したように、既婚女性は男性に対する依存が少ない。「妻問婚」で待つしかできない女性は寂しいと

感じるが、律令の規定によってある程度の権利が守られ、たとえ離婚しても男性に依存しなくて生活することができ、恋が破れても絶望せずに幸せを追求し続けることもできよう。そうすると、女性歌人が詠み上げた寂寥には、恋への憧れや情熱を含むのも理解できるだろう。

したがって、歴史的背景という外的要因からいうと、女性歌人の歌における積極的な恋愛観は、一方では和歌が万葉時代の男女関係において大きな役割を果たすためであり、もう一方では当時の婚姻制度が女性の社会地位と権利をある程度保障するためでもあろう。

#### 4. おわりに

以上では、本報告は『萬葉集』における女性歌人の歌を中心にして日本古代女性の恋愛観について検討してきた。

まず、大伴坂上郎女をはじめとする女性歌人の和歌に基づき、その中に含んでいる恋への情熱と期待を考察し、女たちがどんな状況にあっても、恋への憧れが変わらないという結論が解明された。次に、悲しみを詠んだように見える数首の和歌によって女性の執着心を検討し、彼女たちの恋に対する積極的な姿が示された。悲恋と考えられる和歌は実際に、女性歌人のポジティブな恋愛観を見出し、乙女のような恋心と強い情熱も読み取れた。最後、時代背景と結びつけ、歴史的な要素と古代女性の恋愛観にあるかわりに関して私見を論じてきた。歌が男女関係において決定的な地位を占めるという時代の特徴や、当時の婚姻制度などの外的要因は相乗的に、女性の恋愛意識に一定の影響を与えたと言えよう。

ただ、本報告で言及しなかった女性歌人の作品がまだ多くあり、その中にもほかの恋愛意識が含まれるかもしれないが、紙幅の関係で本報告では取り上げることができなかった。それが今後の課題として残される。

#### 注

- 1 小林敏男 『古代女帝の時代』 校倉書房 1987 PP109-137
- 2 例えば、五世紀後半に建てられたとされる長瀬高浜古墳には女性首長の墓が多い。被葬者の性別の分かった墓九基のうち、男のために築いたものが四基、女のためのものが五基あり、また相対的に規模が大きい。長瀬高浜古墳にはほかの類似な例もある。
- 3 奥田暁子 「王権と女性」『女と男の時空：日本女性史再考1』 藤原書店 1995 P198
- 4 同上 P202
- 5 成清弘和 『日本古代の王位継承と親族』 岩田書院 1999 PP163-164
- 6 遠藤織枝 「古代の日本語と女性—自由にことばを駆使した女性たち」『女のことばの文化史』 学陽書房 1997 P30
- 7 鈴木日出男 「女歌の本性」『古代和歌史論』 東京大学出版会 1990 PP43-63
- 8 佐藤太平 「日本民族恋愛史」『複製日本女性史叢書・第13巻昭和期』 クレス出版 2008 P36
- 9 鈴木日出男 『古代和歌史論』 東京大学出版会 1990 PP54-55  
鈴木氏は、「女歌は、恋や恋の情調を詠もうとする、その発想の根源に否定的な契機がはらまれている歌ということになる。それが、対人生に執する場合に、相手を言い負かそうとする切り返しのひびきが強まり、逆に自己に執る場合には、孤独な内容や悲哀の心象風景の色彩が強められるのである。そこに、女歌の本性的なように思われる。たとい男であっても、そのような発想に立つてよめば、それも女歌のうちのひとつである」と指摘した。
- 10 小島憲之・木下正俊・東野治之（校注／訳）『萬葉集（1-4）』（新編日本古典文学全集） 小学館 1994-1996
- 11 現代語訳：遙か天の原から生まれてきた神様よ。奥深き山から取ってきた賢木の枝に白香や木綿を取り付けて、聖なる瓶の土を掘って掘えつけて、竹玉をいっぱい連ねて垂らします。私も祈りの衣装を着て、鹿のように膝を折って伏せます。このようにまでして祈っていても、あの人にまだ逢えないのでしょうか。（筆者訳。以下同。）
- 12 現代語訳：木綿を折り畳んで、手に取り持ちます。このようにまでして祈っていても、あの人にまだ逢えないのでしょうか。
- 13 「13歳ごろ穂積皇子に嫁したが、20歳ごろ死別。のちに藤原麻呂と一時関係があったが、麻呂とも

- 早くに死別。異母兄の宿奈麻呂と結婚、しかし33歳ごろ死別（『日本大百科全書』）。（ジャパンナレッジによる。2019年11月アクセスした。）
- 14 現代語訳：もう年を取った老女なのに、これほど恋に溺れて堪えられなくて、まるで子どものようです。
- 15 現代語訳：春になるたびに、流れる川に映る花を本物だと見間違えて、折ろうとするが、折ることもできずにただ袖だけが濡れてしまうのでしょうか。
- 16 小沢正夫・松田成穂（校注／訳）『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11）小学館 1994
- 17 同前註7
- 18 現代語訳：夏の野の深い繁みに隠れて、ひっそりと咲いている可憐な姫百合のように、思う人に知られない恋は、非常に苦しいことです。
- 19 現代語訳：白い鳥の飛ぶ飛羽山の松のように、あなたの訪れを待ち続けています。私はこの何ヶ月もの間、ずっとあなたを恋しく思っています。
- 20 富山房編集部（編集）『毛詩』（漢文大系・第12巻増補版）富山房 1975
- 21 現代語訳：あなたは私が打廻の里に住んでいることを知らないから、あなたをいくらお待ちしていても、おいでにならなかったのですね。
- 22 現代語訳：私の住んでいる所が遠いので、あなたが来られないと分っています。そうして、きっと待っているでしょう。わが君に会いたいのですから。
- 23 国民文庫刊行会（編）『四書・孝経』（国訳漢文大成・経子史部第1巻）国民文庫刊行会 1923
- 24 現代語訳：朝霧の中のように一度きりしか、ぼんやりとお逢いしていない人なのに／ために、私の命も絶えそうになるほど慕い続けています。
- 25 『萬葉集』第15巻3747番「我が宿の 松の葉見つつ 我れ待たむ 早帰りませ 恋ひ死なぬとに」、3748番「他国は 住み悪しとぞ言ふ 速けく 早帰りませ 恋ひ死なぬとに」、3772番「帰りける 人来たれりと 言ひしかば ほとほと死にき 君かと思ひて」。
- 26 『萬葉集』第13巻3248番、柿本人麻呂の歌「しきしまの 倭の国は 言霊の 佐くる国ぞ 真幸くありこそ」。また、『萬葉集』第5巻894番、柿本人麻呂の長歌「神代より 言ひ伝えて来らく そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり…（後略）」に「言霊の幸はふ国」という表現もある。
- 27 同前註8
- 28 胡潔「婚姻習俗と文学：『恋』の諸相の底流にあるもの」『論集：異文化としての日本』名古屋

- 大学大学院国際言語文化研究科 2009 P147
- 29 同上
- 30 原文は「大化二年（六四六）三月甲申（二十二）。詔曰。（中略）復有妻妾為夫被放之曰。經年之後。適他恒理。而此前夫。三四年後。貪求後夫財物。為己利者甚衆。復有恃勢之男、浪要他女。而未納際。女自適入。其浪要者嗔求兩家財物。為己利者甚衆。復有亡夫之婦。若經十年及二十年。適人為婦。并未嫁之女。始適人時。於是妬斯夫婦、使祓除多。復有為妻被嫌離者。特由慙愧所惱。強為事瑕之婢」である。
- 舎人親王（編）『日本書紀』卷第二十五 P19（国立国会図書館デジタルコレクションによる。2019年11月アクセスした。）
- 31 原文は「凡應分者、家人、奴婢、（氏賤不在此限、）田宅、資財、（其功田、功封、唯入男女、）總計作法、嫡母、繼母、及嫡子、各二分、（妾同女子之分、）庶子一分、妻家所得、不在分限、…（後略）」、「凡棄妻、先由祖父母父母、若無祖父母父母、夫得自由、皆還其所覓見在之財、若將婢有子亦還之」である。
- 国書刊行会（編）『令集解・第一』卷第十戸令 PP314-316、PP332-333（国立国会図書館デジタルコレクションによる。2019年11月アクセスした。）
- 32 成清弘和「律令の離婚規定について」『続日本紀の諸相：創立五十周年記念』（続日本紀研究会編）塙書房 2004 PP233-248

#### テキスト

- 国民文庫刊行会（編）（1923）『四書・孝経』（国訳漢文大成・経子史部第1巻）国民文庫刊行会
- 富山房編集部（編）（1975）『毛詩』（漢文大系・第12巻増補版）富山房
- 小島憲之・木下正俊・東野治之（校注／訳）（1994-1996）『萬葉集（1-4）』（新編日本古典文学全集）小学館
- 小沢正夫・松田成穂（校注／訳）（1994）『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11）小学館

#### 参考文献（年代順）

- 小林敏男（1987）『古代女帝の時代』校倉書房
- 鈴木日出男（1990）「女歌の本性」『古代和歌史論』東京大学出版会
- 奥田暁子（1995）「王権と女性」『女と男の時空：日本女性史再考1』藤原書店
- 遠藤織枝（1997）「古代の日本語と女性—自由にことばを駆使した女性たち」『女のことばの文化史』学陽書房
- 成清弘和（1999）『日本古代の王位継承と親族』岩

田書院

成清弘和 (2004) 「律令の離婚規定について」『続日本紀の諸相：創立五十周年記念』（続日本紀研究会編） 塙書房

佐藤太平 (2008) 「日本民族恋愛史」『複刻日本女性史叢書・第13巻昭和期』 クレス出版

胡潔 (2009) 「婚姻習俗と文学：『恋』の諸相の底流にあるもの」『論集：異文化としての日本』 名古屋大学大学院国際言語文化研究科